

<実践事例>

## 「京産共創プロジェクトⅣ シラバス論争—THE FIRST MISSION—」実施報告 —学生・教員・職員で考える理想のシラバス—

佐藤 里奈<sup>1</sup>・田村 玖美<sup>2</sup>・福島 寛史<sup>3</sup>・森脇 可奈子<sup>4</sup>

大学は学びの場であるにもかかわらず、学生は履修登録の際に「楽に単位がとれるかどうか」などで授業を選択していることが少なくない。本稿では、学生・教員・職員の三者がシラバスに対する互いの見方の違いに気づき、学生が授業の中身で授業を選択するようになるには、シラバスにどのような工夫が必要か話し合う機会として、京都産業大学学生 FD スタッフ AC 燦が企画した「京産共創プロジェクトⅣ シラバス論争—THE FIRST MISSION—」について、その実施内容と成果を報告する。

キーワード：京産共創プロジェクト、学生 FD、シラバス、学生視点

### 1. はじめに

2016年冬、京都産業大学の学生 FD スタッフ AC 燦は、シラバスをテーマとして学生・教員・職員が話し合う、「京産共創プロジェクトⅣ シラバス論争—THE FIRST MISSION—」を開催した。

「京産共創プロジェクト」とは、京都産業大学の学生・教員・職員の三者が、互いの立場を超えて対等に意見交換ができる場の提供を目的として、学生 FD スタッフ AC 燦が教育支援研究開発センターとの協働で開発し、2011年より開催してきた学生・教員・職員参加型の FD イベントであり、普段あまり話す機会のない三者が、互いの考え方の違いを知り、距離を縮めることで、より良い京都産業大学を学生・教員・職員の協働で創る、その契機となることを期待するプロジェクトである。

第4回となる今回の「京産共創プロジェクト」で学生 FD スタッフ AC 燦がシラバスに着目した背景には、企画を担当した学生自身が、大学には教員や学びをサポートしてくれる職員がいて、学ぶ環境が整っているにもかかわらず、学生は受講科目を決める際には、単位が楽に取れる（通称ラクタン）かどうかを判断基準としていることが少なくなく、そのことに勿体ないと感じたからである。ラクタンかどうかではなく、授業の中身で科目を選択し、その科目が自分の身になるか、しっかりと考えて授業を受けるようになりたい。そのような思いから、学生が履修登録の際に見るシラ

バスを「京産共創プロジェクトⅣ」のテーマに選んだ。

シラバスとは、各授業科目の詳細な授業計画であり（文部科学省 2008）、教員がどのような内容の授業を行い、学生にどのように受講すべきか示すものだが、学生が科目選択の際に考慮したい内容が書かれていない可能性もある。「京産共創プロジェクト」で学生・教員・職員がシラバスについて意見交換を行う場を創り、互いの思いや視点の違いを共有することができれば、学生視点も取り入れた現行シラバスの改良や、魅力的なシラバスの作成に繋がる議論ができるのではないかと考えた。またその議論は大学内に必要であると考えた。そこで、シラバスの今後のあり方を、学生・教員・職員が本音で語り合い、探ることをミッションとする、「シラバス論争—THE FIRST MISSION—」を企画・開催した。

本稿では、第1章で「京産共創プロジェクトⅣ シラバス論争—THE FIRST MISSION—」の開催に至った経緯について述べた。第2章では、本イベントの実施概要とプログラムの内容を紹介し、第3章に参加者のグループワークで出された意見を分析した結果を報告する。第4章で本プロジェクトの成果を述べ、第5章で「京産共創プロジェクト」と学生 FD スタッフの活動について再考する。

<sup>1</sup> 京都産業大学 経営学部 4 年次、<sup>2</sup> 京都産業大学 経営学部 卒業生、<sup>3</sup> 京都産業大学 法学部 4 年次、<sup>4</sup> 京都産業大学 教育支援研究開発センター

## 2. 「京産共創プロジェクトⅣ シラバス論争 -THE FIRST MISSION-」の概要

本章では、本イベントの実施概要とプログラムの内容を紹介する。

### 2.1. 実施概要

イベント名：「AC 燦 presents 京産共創プロジェクトⅣ シラバス論争 -THE FIRST MISSION-」

日時： 2016年1月8日(金)17:00~19:00

場所： 京都産業大学 雄飛館ラーニング・commons

参加者数：72名（学生36名、教員12名、職員24名）

主催： 京都産業大学 学生FDスタッフ AC 燦

共催： 教育支援研究開発センター

実施プログラム：

1. 開会
2. 趣旨説明と問題提起
3. グループワーク ①シラバスに対する考えの共有（現状把握） ②現状の打開策を考える
4. 全体共有
5. 閉会・アンケート記入

### 2.2. プログラムの内容

#### 2.2.1. 趣旨説明、問題提起

イベント当日、学生FDスタッフAC 燦は代表学生による開催挨拶に続けて、今のシラバスと学生の授業選択の現状を学生視点からリアルに伝える自主作成ビデオ<sup>1)</sup>を上映し、「京産共創プロジェクトⅣ シラバス論争 -THE FIRST MISSION-」の開催趣旨と問題提起を次のように参加者に説明した。

「大学は学びの場であるが、学生は授業を選ぶ余地があったとしても、つい、内容を考えず、単位の取りやすい授業を選んでしまっている。もし、現行のシラバスがもっと学生が内容を選びたくなるような魅力的なシラバスになれば、より多くの学生が、内容を考えて授業を選ぶようになるのではないか。シラバスに関わっている学生・教員・職員で話し合うことで、互いにとっての理想のシラバスを考えたい」

これらの説明の後、参加者は指定された11のグループに分かれ、グループワークを開始した。各グループは、学生・教員・職員の三者で意見交換

ができるように構成された。

#### 2.2.2. グループワーク

グループワークでは、シラバスの現状を把握し、より魅力的なシラバスにするアイデアについて意見交換ができるように2段階の議論を設けた(2.2.2.1. 及び2.2.2.2. 参照)。各グループのファシリテータは学生FDスタッフが務めた。

##### 2.2.2.1. グループワーク①「シラバスに対する考えの共有（現状把握）」

グループワーク①では、学生には「授業選択の際、シラバスのどこを見ているか?」、また「何を基準に科目を選んでいるか?」、教員・職員には「学生にシラバスのどこを見てほしいか」、また「学生のと看、どのように科目を選んでいたか、選んでおくとよかつたか」という問いかけをして議論を進めた(図1)。

これらの話し合いは、学生・教員・職員の三者がシラバスを見る際に、どのような項目に関心を持っているか、どのような項目に関心を持ってほしいと思っているか、参加者がそれぞれの考えを共有し、互いの視点の違いを知ること、現状の気づきを得ることを目的とした。



図1. 意見交換を行う学生・教員・職員

考えを共有する際、参加者は用意された付箋に、自らの考えや意見をキーワードなどで書き出し、他のメンバーに紹介しながら意見交換を行った。これらの付箋は、プログラム終了後にすべて回収し(図2)、グループワークで話し合われた意見の分析に用いた(3章参照)。



図 2. 付箋に書き出された意見やキーワード

### 2.2.2.2. グループワーク②「現状の打開策を考える」

グループワーク②では、グループワーク①の議論を通じて互いに気づいた視点の共通点や違いなど、現状の課題をふまえ、「シラバスのどこをどのように変えると、より魅力的なシラバスになるのか」についてアイデアを出し合い、各グループで現状を打開する一押し案をまとめた。

これらの一押し案は、グループワーク終了後に、代表グループによる全体共有や会場内に掲示して参加者に共有され、閉会式での大城光正学長による講評、参加者によるアンケート記入を以って、プログラムは終了した。

## 3. 本イベントを通じた意見集約

本章では、グループワーク①「シラバスに対する考えの共有（現状把握）」で参加者が話題に上げた関心事項について、全グループから回収した付箋を用いて分析した結果を報告する。また、グループワーク②「現状の打開策を考える」で各グループが出した現状を打開する一押し案についても内容を集約し、魅力的なシラバスにするアイデアとして紹介する。

### 3.1. シラバスに対する参加者の関心事項

参加者のシラバスへの関心について、全体的な傾向を把握するために、回収した付箋に書かれた229の意見やキーワードを、内容に応じて、シラバスに記載されている9項目（「ナンバリング」<sup>2)</sup>「授業概要」「授業内容・計画」「準備学習等」「授業の到達目標」「身につく力」「履修上の注意」「評価方法」「教材」）に分類し、これらの項目に当てはまらない内容は「その他」に分類して集計を行った。図3に、参加者が出した意見を、分類項目別の比率で示す。

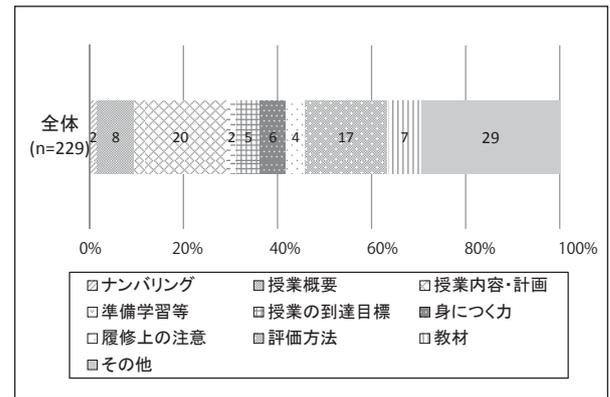


図 3. 意見の分類項目別比率（参加者全体）

図3より、グループワークでの参加者の意見は、シラバスの9項目以外の「その他」が29%を占めているが、約70%は、シラバスの9項目の何らかの事項に関心を示して意見が出されていたことを示している。

個別に見ると、「その他」29%、「授業内容・計画」20%、「評価方法」17%が上位3位を占めている。「その他」の比率が最も高いことから、シラバスに記載されている項目に留まらず、幅広い内容で意見交換が行われていたと考えられる。また「その他」に書かれた内容を別途、付箋から読み取ると、学生・教員・職員ともに「先生」についての言及が最も多く、ラクタンなど教員についての口コミや、教員の個性も含め、科目担当教員についての情報も、科目を選択する際に重要なポイントであるとの視点が三者で一致している。

### 3.2. シラバスに対する三者の視点—共通点と異なる点—

次に、学生・教員・職員の視点の異なりを明らかにするために、三者の意見の分類項目別比率を基に、それぞれが関心を寄せる項目の比較を行った。結果を図4に示す。

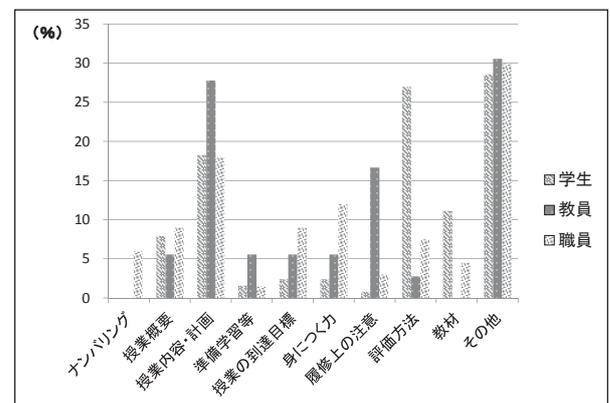


図 4. 意見の分類項目別比率（三者比較）

図4より、「その他」に次いで、関心が高い項目は、学生は上位より「評価方法」、「授業内容・計画」、「教材」の順であるが、教員は「授業内容・計画」、「履修上の注意」の順で、それに続いて「授業概要」「準備学習」「授業の到達目標」「身に付く力」の4項目が同位で並んでいる。職員は「授業内容・計画」、「身に付く力」、「授業の到達目標」の順であった。

図3で全体に占める比率が高かった「その他」と「授業内容・計画」は、図4でも三者に共通して比率の高い項目となっているが、それ以外については、三者の関心・視点に異なりがあると言える。

特に、学生は授業選択の際、「その他」、「評価方法」「授業内容・計画」、「教材」により高い関心を示しているが、「評価方法」と「教材」についての教員・職員の関心はそれほど高くなく、むしろ、教員は「履修上の注意」や「準備学習」に、職員は「身につく力」や「授業の到達目標」に関心を持ってほしいと考えている。しかし図4によると、これらの項目への学生の関心はいずれも5%を下回っていて低調である。また職員が関心を持ってほしいと考えている「ナンバリング」に至っては、学生・教員共に付箋に意見としては触れていない。ここで興味深いのは、「その他」に書かれた内容を再び付箋から読み取ると、学生は科目選択のポイントとして「空きコマ」を多数挙げている点である。このことから、職員が関心を持ってほしいと考える科目のつながりを重視した「ナンバリング」とは逆の視点で、学生は科目を選択しているという現状の一端が明らかになった。

### 3.3. 現状の打開策

ここでは、グループワーク①の議論を通じて、各自が三者の視点の共通点や異なる点など気づきを得た後に実施したグループワーク②「現状の打開策を考える」で、より魅力的なシラバスにするために、各グループが自由な発想でまとめた一押し案の内容を集約し、次の5点で報告する。

#### 1. シラバスを見やすくする

シラバスのダイジェスト版を作ったり、アンダーラインやキーワードの色付けで文面に強弱をつけたりすることで、分かりやすく使い易いシラバスにする。

#### 2. Web シラバスを複数科目の見比べが容易なシステムに改良する

科目の比較がシステム上で出来れば、履修登録の時に、自分に合った科目が検討しやすくなり、授業への関心も高まる。

#### 3. 夢から逆算できるシラバスを開発する

「履修時に夢や目標が持てる」、「4年間のシミュレーションができる」機能をシラバスに搭載する。例えば、職業機能(ex.パイロットや警察官、宇宙飛行士など)をシラバスに追加し、その職業に就くためのおすすめ授業がシラバスに表示できるようにする。あるいは学部ならではの職業に就職された先輩学生の4年間の時間割を公開する。

#### 4. 授業の個性をアピールできる「自由欄」をつくる

学生から「もっと授業の魅力を伝える」シラバスへの要望があり、教員からは「昨今、シラバスの自由度がなくなっている」との発言があったことから話し合われた現状への打開策。「自由欄」は、テキストだけでなく、授業紹介ビデオの掲載などにも応用可能とする。

#### 5. 前年度の授業アンケートをシラバスに載せる

授業アンケートの結果を工夫してシラバスに載せることで、その教員の授業での雰囲気や実際に履修した学生の感想を知ることができ、履修した時の学生のギャップを減らすことができる。前年度の学生から受講のアドバイスなど受講のタメになることを書いてもらうことで、履修時の参考になるメリットもある。

上記の5つの打開策は、現状のシラバスの見やすさ、操作性の改善も含め、いずれも学生、教員、職員が「自分の興味・関心に合う科目を受講したい・受講してほしい」という率直な思いに向き合い、より魅力的なこれからのシラバスのあり方について、自由に意見を交わした結果である。

### 4. イベントの振り返り

本章では、イベント終了時に回収したアンケートの結果を用いて本イベントを振り返り、イベント後に教学センターで行われたシラバスへの改善を本イベントの成果の事例として紹介する。

#### 4.1. アンケート結果

本イベントの終了時に参加者を対象に、シラバスについて学生・教員・職員の三者で語り合った本イベントへの共感度を問うアンケートを実施した。本イベントの参加者は、学生36名、教員12名、職員24名の合計72名であり、回答者数は、運営スタッフを除く学生23名(回答率63.9%)、教員6名(同50.0%)、職員12名(同50.0%)の合計41名(同56.9%)であった。紙幅の都合上、

本イベントへの共感満足度に関する設問に限定して結果を表1に示す。調査は5件法で行い、表内の数値は平均値である。

**表 1. アンケート結果 (学生 N=23, 教員 N=6, 職員 N=12)**

イベントへの共感満足度	学生	教員	職員
他の人の意見を聞くことで新たな発見があった	4.52	4.50	4.50

表1より、「他の人の意見を聞くことで新たな発見があった」とするイベントへの共感満足度は学生・教員・職員のいずれも4.50以上となる高い評価が得られた。三者のすべてから、4.50以上の評価を受けた「京産共創プロジェクト」は第4回目の今回が初めてで、その意義は大きい。このような結果が得られた理由として、本イベントが、シラバスという大学の教育ツールをテーマにしたことで、学生・教員・職員の三者にとって、より具体的な議論が可能であったことが一因と考えられる。

**4.2. イベント後に取り組まれたシラバス改善の事例**

今回のイベントには、教学センターから6名の職員が参加された。全体発表で科目のナンバリングが話題となった際に、参加学生の殆どがナンバリングを知らないことが会場で分かり、対策が必要だと担当者が実感されたことから、Webシラバス検索画面上に、学部のナンバリング別シラバスをPDFで提供する改善が迅速に図られた。このシラバスは、カタログ機能を重視し、項目を絞ったコンパクト版となっており（京都産業大学教育支援研究開発センター 2016）、イベントでの議論にヒントを得て取り組まれたものである。

**5. おわりに**

今回の「京産共創プロジェクトⅣシラバス論争-THE FIRST MISSION-」では、72名の参加者の話し合いにより、より魅力的なシラバスにするためのアイデアを得ることができた。参加者にとって共感満足度の高い学生・教員・職員による協働の場が提供でき、イベント後には、参加者自らが組織的にシラバスの改善に取り組む成果も観察された。

学生FDスタッフの活動には、「ただイベントを実施するだけなのか?」、「成果は何なのか?」と自問自答する場面が往々にしてある。

今回、参加者がイベントでの議論にヒントを得て「改善」という目に見える、新たなアクションを起こしたことは、イベントを企画実施した学生FDスタッフAC燦にとって、自らの活動に手ごたえを感じる出来事であった。と同時に、学生FDスタッフらは、その出来事の前後で自分たちの考えが変化したことを以下のように表現している。

「これまでは活動に対して目に見える成果への焦りがあったが、イベントを実施することで、参加者が話し合いをきっかけに気づきを得て、改善を図っていこうと思ってくれることが大切なのだとわかった。今回のように、対等な立場で三者の意見交換が出来る場を作り、互いの思いや違いを理解し合いながら、解決策やアイデアを導き出すことが出来れば、イベント後も、参加者を動かす原動力になる」

大学のFD活動の一翼を担い、学生・教員・職員が立場を越えて対等に話す場の提供に幾度も取り組んできた学生FDスタッフが京産共創プロジェクトと自らの活動の意義を再考し、それを記録することも、今後、これらの活動に関わる学生、次の世代の学生にとって一助になるであろう。

そして今後も、より良い京都産業大学とするために、学生・教員・職員の三者が協働し、闊達に意見交換する場が、大学内に継承されることが望まれる。

**注**

- 1) 寸劇を交えた自主作成ビデオでは、「シラバスは見る価値がない」「バイトの方が勉強になる」という学生や、授業に興味を持たず寝ている学生が登場し、ナレーターが「現状のシラバスは、学生に授業の魅力等が伝わるものになっていない。そのため学生はシラバスの中身を見ず、必修科目と、必要な単位分のできるだけ楽な授業をただただとるようになってしまっている。このままでは、授業を内容でとる学生がいなくなってしまうかもしれない」と訴えかけた。また、教員や職員役も登場し、授業を内容でとってほしくても、カリキュラムやその他の縛りがあって、それができないと嘆くシーンが映し出された。そして「このままではいけない! 学問の意義がなくなってしまう! みんなで守ろう! もっとシラバスが意義のあるものになるにはどうしたらいいか考えよう!」というメッセージが会場の参加者に向けて発せられた。
- 2) ナンバリングは、授業科目に適切な番号を付し分類することで、学修の段階や順序等を表し、

教育課程の体系性を明示する仕組み（文部科学省 2012）。京都産業大学では、Web シラバスやピアサポーターによる履修登録の質問集（京都産業大学教学センター 2016）等で、学生に向けた説明がなされている。

### 参考文献

- 京都産業大学教育支援研究開発センター（2016） CERADES NEWS 7. [http://www.kyoto-su.ac.jp/about/cerades/lpom47000001bz66-att/ce\\_news07.pdf](http://www.kyoto-su.ac.jp/about/cerades/lpom47000001bz66-att/ce_news07.pdf)（参照 2017.12.15）
- 京都産業大学教学センター（2016）ピアサポーターの履修登録よくある質問集 Q&A [http://www.kyoto-su.ac.jp/outline/shisetsu/kyo\\_cen/fresher/peer/pdf/qa.pdf](http://www.kyoto-su.ac.jp/outline/shisetsu/kyo_cen/fresher/peer/pdf/qa.pdf)（参照 2017.12.15）
- 文部科学省（2008）中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申） [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm)（参照 2017.12.15）
- 文部科学省（2012）中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」（答申） [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)（参照 2017.12.15）

summarized into five key points, including syllabus accessibility and appeal, for further consideration.

KEYWORDS: KSU academe's co-creation project, Student-initiated Faculty development (FD), Syllabus, Students' perspective

2018年1月12日受理

1 Fourth-year Student, Faculty of Management, Kyoto Sangyo University

2 Graduated Student, Faculty of Management, Kyoto Sangyo University

3 Fourth-year Student, Faculty of Law, Kyoto Sangyo University

4 Center for Research and Development for Educational Support, Kyoto Sangyo University

---

## Discussing the Ideal Syllabus among Students, Faculty, and Staff — A Report on KSU Academe's Co-creation Project IV “Syllabus Controversy, the First Mission” —

---

Rina SATO<sup>1</sup>, Kumi TAMURA<sup>2</sup>, Hirofumi FUKUSHIMA<sup>3</sup>, Kanako MORIWAKI<sup>4</sup>

When registering for courses, students often choose their courses based on whether the credits can easily be gained. This article reports on the attempts of Kyoto Sangyo University (KSU) Academe's Co-creation Project IV—planned and organized by the Student-Initiated Faculty Development (FD) Association “SAN”—to discuss the syllabus among students, faculty, and staff. In the discussion, they shared their similar and different perspectives on the syllabus and then exchanged ideas on the ideal syllabus to make students choose their courses based on the course contents. These ideas are